宇喜多家史談会会報
第 89 号
令和6年1月16日

宇喜多家史談会
〒七〇〇-〇八二六
岡山市北区磨屋町六―二八
光珍寺気付

『現代語訳　備前軍記』の監修と宇喜多氏

岡山県立博物館　内池英樹

小稿は、光珍寺法要（令和五年十一月二十日開催）において、お話ししたものを再構成したものになります。当日、言葉が足りなかった点も含めて、加除訂正を加えものになっておりますことを、ご承知おき下さい。

さて、令和四年十月に山陽新聞社から、『現代語訳　備前軍記』及び『現代語訳　備中兵乱記』が刊行されました。幸いかどうかはわかりませんが、二冊の監修に携わらせていただく機会を頂戴しました。土肥経平によって著された「備前軍記」の詳細については、『現代語訳　備前軍記』（以下、『備前軍記』）に載せているので、よろしかったらご確認ください。

『備前軍記』を監修する活動（作業）を通して、宇喜多氏について考えてみたことを、それとなくまとめてみたいと思います。まとまった論文とか、新たな発見などではなく、一個人の意見になってしまいますが、ご了承いただければと思います。

一、監修するための前提条件

「備前軍記」は、岡山藩士土肥経平（一七〇七～八二）が領内にあった旧跡や書状などを見たり、聞いたりしてまとめたものです。現在の歴史学のような手法はありませんが、可能な限りの材料を集めて、備前を中心に繰り広げられた戦国絵巻をまとめたものです。

柴田一氏も『新釈　備前軍記』の解題で「戦記物語」「軍記物」（後の時代にまとめられたもの）としたように、すべてが史実ではないと断られています。

たしかに、一九八〇年代以降の研究の進展により、いろいろと年代比定等が変わってきています。例えば、浦上宗景の居城和気天神山城が、「備前軍記」では天正五年（一五七七）に落城したとされていましたが、近年では天正三年（一五七五）に落城されたという説が有力になっています。また落城後についても、宗景は少なくとも天正八年あたりまでは、備前への影響力を復活させようと蠢動しており、天神山城落城後の活動も見えてきました。

また、『岡山県史』は、「備前軍記」を元にして書かれていますが、その後県内各地で資料調査が進み、秘蔵されていた、または年代の特定が変わった等のことがあり、「備前軍記」の限界が指摘されていました（例：三宅克広氏「中世文書と近世の編纂物」（『法政史学』五八号、二〇〇二（平成十四）年））。

一方では、宇喜多氏、小早川氏等、江戸時代を通して地域を治めた権力はないことから、断片的にでも残った資料や、伝承をつなぎ合わせていく取り組み自体も重要ではないかと、私は考えました。

前述のように資料的な限界があるかもしれませんが、どこまでは歴史として見ても良いか、また、江戸時代の土肥経平たちから見た宇喜多氏の時代はどのようなものだったのかを考えるぐらいのゆとりを、私たち自身が持てたら良いのではないかとも考えました。

そのため、現時点でわかる範囲になりましたが、できるだけ補注を加え、史実との乖離した部分については、指摘を行いました。一方で、できるだけ土肥経平や柴田一氏の記述は手を加えず、お二人の歴史観も大切にするように試みました。今後、必要に応じて、読者が適宜アップデートをしてもらえれば良いと考えています。

二、監修した中で見えた宇喜多氏の姿

ここからは、監修の中で見えてきた宇喜多氏の様子をご紹介したいと思います。

どこから出てきた言葉なのかがはっきりしませんが、宇喜多直家のことを「戦国の梟雄」と呼ぶことがこれまでありました。確かに